

宗教・文化研究所公開講座講演録要旨

丹後局と卿二位 — 後白河・後鳥羽院政の光と影 —

曾 我 部 愛

今日は、「丹後局と卿二位―後白河・後鳥羽院政の光と影―」というタイトルでお話をいたします。

まず、レジュメの確認をします。レジュメは、「丹後局と卿二位―後白河・後鳥羽院政の光と影―」というタイトルが書かれているホチキス留めのものが一つと、もう一つは、一枚で表・裏になっている「史料レジュメ」というものがあります。お手元にございますでしょうか。誤字、脱字が少しありますので、話しながら適宜訂正します。よろしく願います。

自己紹介を兼ねて話しますと、私は鎌倉時代の天皇家と政治史の話をメインに研究しています。今回いただいたテーマは「丹後局と卿二位」ということで、まさに天皇家、公家社会の話ですので、大変ありがたいお話です。ただ、私は、丹後局に関してはあまり詳しくありませんでした。

この話をいただいたときに、まず最初に浮かんだのが二〇〇五年の大河ドラマの「義経」です。元ジャニーズの

滝沢秀明さんが主役を演じました。その中に出てきた丹後局は、インパクトが大変強くて記憶に残っています。夏木マリさんが丹後局、平幹二朗さんが後白河法皇を演じていました。ドラマの中で丹後局は、後白河とともに幽閉されているシーンでは、非常に怖くて異様な感じの女性として描かれていました。

そのイメージがどうしても強かったので、丹後局は、かなり高齢の女性のイメージがありました。ところが、今回調べたところ、実はあの当時、まだ三十代だったと分かりましたので、一度ついたテレビのイメージを拭き去るのはなかなか難しいと実感した次第です。そこで、今日は丹後局の實在の姿を見ていきたいと思います。

はじめに

○「女人入眼ノ日本国」

では、話に入ります。まず、「はじめに」の所です。今回のタイトルでもあります。東の北条政子、西の卿二位高倉兼子の出現に際し、有名な慈円が『愚管抄』（慈円著）で「女人入眼ノ日本国」という言い方をしています。これが出てくるのは一カ所だけではありません。まず、「卷三」には、「女人此国ヲバ入眼スト申伝ヘラルハ是也」とあり、「女人」と「入眼^{じゆがん}」という言葉が出てきます。この言葉は、奈良時代までの女性天皇について指しています。そのあとの「卷六」には、今回のテーマである、「女人入眼ノ日本国イヨイヨマコト也ケリト云ベキニヤ」という言葉が登場します。この言葉は、「日本を女人が完成させるということが、いよいよ本当のことになったと言わなければならないか」という意味です。

これについては、慈円の個性や出自も関係していますが、女性の政治的活躍を必然とする慈円の考えが表れてい

ます。さらに、慈円は、女性の政治的活躍の代表格は北条政子と卿二位だと表明したことになります。

北条政子に関しては、のちほど野口華世先生から面白いお話がいろいろ聞けると思いますので、私は西の卿二位を採り上げます。

○悪女の代名詞

慈円は、女性について非常に高く評価していますが、一方、日本の歴史においては、女性に関してどのようなイメージで語られてきたのかについて例を挙げます。

かなり前ですが、一九二四年に『烈婦か妖婦か 国史上問題の女性』（国史講習会編・雄山閣）という本が出版されました。この本は、日本史上で特に有名な女性、もしくは日本史上に表れた女性観について、当時、有名だった三十五人の著者が論じた論集です。

ここでは、薬子の変で有名な藤原薬子、美人で有名な小野小町、文覚との逸話で有名な袈裟御前、そして、今回採り上げる丹後局、もちろん北条政子も入っていますし、中世では日野富子、出雲阿国、近世では春日局、徳川綱吉のお母さんの桂昌院といった人たちが採り上げられています。

タイトルが「烈婦か妖婦か」という時点で、考え方が何となく分かると思います。「烈婦」、「烈女」とは、「節操を固く守る」という意味もありますが、このタイトルは、恐らく、「気性の激しい女性」という意味で使っています。政治上で活躍した女性には、こういう評価が与えられてきたことも事実です。

それが少し変わり始めたのは戦後です。円地文子氏が監修した『人物日本の女性史五 政権を動かした女たち』（円地文子監修・集英社）という本が一九七七年に出版されました。

この本で採り上げられているのは、先ほどの例でも出てきた、おなじみのメンバーで、藤原薬子、丹後局、卿局（卿二位）、阿野廉子、日野富子、春日局などの往年の「悪女」たちです。

ただ、彼女たちを採り上げるにあたって、今回は視角が少し違います。冒頭で、「女性と政治の関わりは、『傾城・傾国』という言葉が示すように、政治を行う者にとってありがたくない存在と思われてきた」ということをはっきりと宣言しています。その見方を変えていこうというのが、このときに論集が組まれた理由です。

このように見てくると、今回採り上げる丹後局と卿二位は、政治に関わってきた「悪女」というイメージで今まで捉えられてきたことは間違いありません。『人物日本の女性史』五 政権を動かした女たち』が出てからもう四十年以上がたちますので、「政治的に活躍する女性」イコール「悪女」というレッテルをそろそろ剥がし、彼女たちが政治的にどのような活動をしたのかを正しく評価する必要があります。そこで、今回は、こうした目標のもとに、あらためて丹後局と卿二位の生き様について見ていきます。

一・丹後局とは

○丹後局高階栄子の前半生

時系列からいくと丹後局のほうが先なので、丹後局から見ていきます。「一・丹後局とは」という名前が有名ですが、彼女の名前は高階栄子です。女性の名前に関しては読み方がいろいろありますので、今回の報告では音読みの「えいし」で通します。

彼女に関しては、不明な部分もなかなか多いですが、父は比叡山延暦寺の法印澄雲で、久安五年（一一四九年）

頃の誕生と言われています。

レジュメの九ページと十ページに系図が三枚あります。レジュメ九ページの【系図一】という小さな系図が丹後局の系図です。『たまきはる』（『建春門院中納言日記』建春門院中納言著）という有名な日記がありますが、その中で建春門院女房として見える人物を書き出したのが今回の系図です。このうち、スライドで青色のマークが引いてある人たち、つまり、丹後局の一族の女性ほぼ全員が建春門院に仕えていたことが『たまきはる』の記述から分かります。建春門院とは後白河の寵姫ちよぎだった建春門院滋子ですが、これにより、彼女に仕える一族だったことが分かります。

ただし、丹後局だけは名前に青色のマークが付いていないのが分かりますか。彼女だけは出仕していたかどうか不明です。出仕していたかどうかは別として、丹後局の母は建春門院の乳母の若狭局だという説もありますので（西井芳子「若狭局と丹後局」、古代學協會編『後白河院―動乱期の天皇』吉川弘文館、一九九三年。五味文彦「女院と女房・侍」、『院政期社会の研究』山川出版、一九八四年）、いずれにしろ非常に深い関係にあったことは間違いないありません。

高階采子の前半生は、ほぼ分かりません。分かっているのは、長寛二年（一一六四年）頃に後白河院近臣の平業房と結婚し、その後、平業房との間に業兼、教成などの子どもを産んでいることです。これらは全部、系図から判明するだけで、そういう記録が残っているわけではありません。

歴史上、丹後局らしき人物が出てくるのはまだまだ先で、その次に活動が分かるのは、安元元年（一一七五年）八月ごろに、後白河院と寵姫の建春門院が平業房の浄土寺堂に御幸したという記事です。

それが史料レジュメの【史料一】後白河院・建春門院、平業房の浄土寺堂に御幸」です。史料本文に返り点は

付けていませんので、読み下し文を見てください。【史料一】は、まさに後白河院と建春門院が平業房の浄土寺堂に御幸したときの『山槐記』（中山忠親著）という記録の記事です。

「十一日、（中略）建春門院、密々に相模守業房の浄土寺堂に御幸す。院（後白河院）明日還御あるべし。女院（建春門院）今夜還御すと云々」、「十一日に後白河院と建春門院が夫妻で相模守業房の浄土寺堂に来たが、後白河院だけがとどまって、建春門院は帰っていった」という記事です。恐らくこのとき、ここに丹後局も同席しているはずですが、史料上に丹後局の名前はまだ見えません。

この記事から、平業房が後白河院の寵愛を非常に受けていた近臣だったということが言えます。業房は、のちに正五位下左衛門佐に任じられ、九条兼実の日記の『玉葉』（九条兼実著）に、「人々耳目を驚かす、言語の及ぶ所にあらず」と書かれるくらい、後白河院にとって寵臣的な立場だったことは間違いありません。

ただし、後白河院の寵臣だったが故に、その後、悲劇が起きます。それは治承三年の政変による平業房の配流です。治承三年の政変については、詳しく言うとは大変長い説明が必要になってしまいますが、治承三年（一一七九年）十一月、平清盛のクーデターによって後白河院政が停止します。そして、後白河院は鳥羽殿に幽閉される事態になります。

その際、関白の松殿基房（藤原基房）が解任されて、院近臣約三十九名が職を解かれて流罪になります。解官・流罪になった院近臣の中に、丹後局の夫で、後白河院の寵臣的立場だった平業房も含まれていました。

しかし、業房は流されることをおとなしく受け入れたわけではなく、伊豆に配流される途中で逃亡して行方知れずになります。結局、翌月の十二月には京都の清水寺の僧房に潜んでいるところを発見されて捕まりました。そして、権大納言平宗盛のもとで拷問を受けたという記録が『山槐記』にあります。それを最後に業房の動向は一切見

えなくなっています。ですので、恐らく、『山槐記』に残っている記録から程なくして亡くなったと推測できます。そこまでいっても、丹後局の姿はまだ現れてきません。

○後白河院の寵愛ちゅうあいと丹後局の栄達

夫の業房が死んだあと、ようやく丹後局が表舞台に登場してきます。レジュメの二ページです。では、丹後局は、どういう形で出てくるかというと、治承三年の政変で鳥羽殿に幽閉された後白河院のそば近くに伺候していることが『愚管抄』に描かれています。

そのあと、恐らく、後白河院の寵愛を受けて、養和元年（一一八一年）十月には観子内親王、のちに宣陽門院と呼ばれる皇女が誕生しています。ですので、幽閉された後白河院のそば近くに伺候して、そこから寵愛を受けたこととなります。

私は冒頭で、「大河ドラマでは、丹後局と後白河院が薄暗い部屋で寄り添っていて、なかなか異様な風景だった」という話をしましたが、そのシーンは、まさに幽閉されていた頃を描いていたわけです。ただし、年齢を考えると、丹後局がそんなに年配ではないことがよく分かると思います。まだ三十歳を超えたぐらいの年齢です。

宣陽門院が誕生したあと、丹後局の位階は、文治三年（一一八七年）二月に従三位、建久二年（一一九一年）六月に従二位と急激に上昇していきます。

こういった状況を受けて、『玉葉』の記主である九条兼実は、丹後局のことを指して、「卑賤ひせんの者なり、然るに殊寵双びなく、李夫人楊妃に異ならざるか」と非難しています。「丹後局は身分が低く、卑賤ひせんの者である」、摂関家の兼実から見ると、たしかに丹後局は身分が低いです。「けれど、後白河院の寵愛は並びがない。そして、その寵愛

の具合は李夫人（漢の武帝の夫人）、有名な楊貴妃に並ぶような寵愛である」と言っています。

ここでようやく表舞台に出てきた丹後局ですが、さらに、今度は朝廷の除目、いわゆる人事や政治へ介入していくことになります。寿永二年（一一八三年）四月十日、「寵臣の女房（業房の妻）に付き達奏す」（『玉葉』）という表現が出てきます。さらに、それから二年後の文治元年（一一八五年）十二月二十八日、「法皇の愛妾」、「丹後と号す。近日の朝務、偏へに彼の唇吻に在り」（『玉葉』）という表現も史料上に登場します。

これは朝廷の政務が丹後局の唇吻しんぷん、まさに口先一つ、したがって、彼女の言葉に左右されている現状を示しています。『玉葉』は決していい意味で書いているわけではありませんが、丹後局が政治に介入していることがよく分かります。つまり、後白河院の寵愛に基づく権威や権力を背景に、丹後局は朝廷内で大きな力を發揮していたことになります。

その後、建久三年（一一九二年）に後白河院が亡くなると、丹後局は出家して、以後、浄土寺に居る二位の位を持った女性ということで「浄土寺二位」と呼称されるようになります。これが彼女の略歴です。

二．丹後局をめぐるエピソード

続いて、「二．丹後局をめぐるエピソード」です。彼女について見ていこうとすると、途切れ途切れにしか出てこない部分があります。ただし、有名なエピソードが幾つかありますので、そこをもう一度追っていきましょう。

○丹後局と後鳥羽天皇の踐祚^{せんそ}

丹後局をめぐるエピソードで一番有名なものは、彼女の言葉によって後鳥羽天皇が踐祚したというエピソードです。有名な話ですが、寿永二年（一一八三年）七月、平氏一門が三種の神器を持つて安徳天皇と都落ちをします。そのあと、都ではどうなったかという、高倉天皇の第四皇子であつた尊成親王が後鳥羽天皇として踐祚するといふ流れになります。

踐祚とは天皇位を継承すること（三種の神器を受け継ぐ）ですが、当時、「即位」と「踐祚」は分かれていたもので、取りあえず「踐祚」という言い方をしています（即位は天皇が踐祚を万人に宣する儀式）。

高倉天皇の皇子は、そもそも四名居ました。レジュメ九ページに「**系図**」院政期く鎌倉初期王家系図」があります。「王家」と書いてありますように、これは天皇家の系図です。丸付き数字は、院政期からの皇位継承の順を表しています。太字になっている一番下の段には、⑩高倉天皇の息子として⑪安徳、⑫後鳥羽、後高倉という三人の名前がありますが、実は一人付け足したい人物が居ます。

まず、安徳天皇について説明します。安徳天皇は、悲劇的な最期を遂げたことで有名な天皇ですが、彼は、平清盛の娘の平徳子、のちの建礼門院が治承二年（一一七八年）に産んだ皇子です。

続いて、坊門信隆の娘の殖子、のちに七条院と呼ばれる女性が治承三年（一一七九年）に産んだのが守貞親王で、翌年に産んだのが先ほど出てきた尊成親王です。系図でいうと、後高倉院が守貞親王、後鳥羽天皇が尊成親王です。守貞親王と尊成親王は一年違いで生まれた兄弟です。

有名なのは、この三人ですが、実は、もう一人、宮内大輔平義範の娘の少将局が治承三年（一一七九年）に産んだ惟明親王と言う人が居ます。「これあき」または「これあきら」という呼び方があります。ですので、系図の空

いている所に惟明親王をぜひ入れてあげてください。

この四人が高倉天皇の息子で、生まれた順番としては、第一皇子が安徳天皇、第二皇子が守貞親王、第三皇子が惟明親王、一番最後の第四皇子が四宮と呼ばれた尊成親王、のちの後鳥羽天皇です。

平氏が都落ちした際に安徳を連れていったのはもちろんですが、実は、守貞親王、のちの後高倉も一緒に連れていっていました。それはなぜかということは、当時の安徳の年齢を考えると分かります。まだ幼い子どもです。彼に万が一のことがあったときに代わりとなる存在、スペアになる存在が必要ということで、恐らく、安徳の皇太子的立場、皇太弟の立場として守貞親王を連れていったのだろーと思います。

ですので、結果的に、平氏が去ったあとの都には第三皇子の惟明親王と第四皇子の尊成親王しか残っていないかったことになります。では、どちらを選ぶかということですが、兄である惟明親王を差し置いて弟の尊成親王が選ばれた理由については、従来から二つの説があります。

一つ目は、祖父の⑦後白河院に対面したときの二人の皇子の対照的な反応が理由だという説です（『平家物語』）。惟明親王がむずかかって嫌がったのに対して、尊成親王（後鳥羽）はにこにこしていたので、後白河院は弟のほうを選んだと言われています。

二つ目は、後白河院の愛妾で寵愛を受けていた丹後局が見た夢のお告げで尊成親王を選んだという説です。この話は『玉葉』にも書いてありますし、『平家物語』、『源平盛衰記』といった有名な作品にも描かれていますので、大変知られています。特に二つ目の説に関しては、これこそまさに丹後局の権勢を象徴する出来事だと考えられます。

二つ目の説に関しては気になる点があります。レジユメの二ページで「（異説）」としましたが、『玉葉』では、

お告げの夢を見た人物の名前が違うということです。『玉葉』には、「女房丹波（御愛物遊君、今は六条殿と号す）」とあります。「丹後」ではなく「丹波」です。

史料レジュメの「【史料二】後鳥羽天皇が選ばれた理由は？」です。「【玉葉】寿永二年（一一八三年）八月十八日条」の読み下し文を読みます。「十八日（中略）、立王の事、義仲（木曾義仲）猶鬱し申すと云々。この事まず始め高倉院両宮を以て卜せらるるの処、官・寮共に兄宮を以て吉たるの由これを占い申す」。次の天皇を誰にするかという話をしたところ、占いなどを含め、兄である惟明親王のほうがいいだろうという結果が出ていました。

ところが、「その後女房丹波（御愛物の遊君、今は六条殿と号す）の夢想到云わく、弟宮（四宮、信隆卿の外孫なり）行幸有り、松の枝を持ち行くの由これを見る。法皇（後白河）に奏す。仍って卜筮に垂き、四宮を立て奉るべきの様思食すと云々」という記事が出てきます。つまり、「兄である惟明親王に決まりかけていたけれども、女房の丹波局の夢によって覆されて、尊成親王が即位することになった」と記されています。

注意したいのは「丹波」です。丹波局という女性については、「（御愛物の遊君、今は六条殿と号す）」という説明があります。この点について一般的に言われているのは、『玉葉』の作者の九条兼実が分かっていなくて名前を書き間違えたのであり、丹波局と丹後局は同一人物だという説です。

それに対して、実は、丹波局も丹後局も両方居たという説を唱えたのが上横手雅敬先生です（上横手雅敬「丹後局と丹波局」『鎌倉時代―その光と影―』吉川弘文館、二〇〇六年、初出一九七二年）。後白河院の皇子である承仁法親王を産んだ元遊女の丹波局という人が存在していて、元遊女というのが先ほどの丹波の説明の「（御愛物の遊君）」とちよーとかぶるということです。「遊君」とは遊女のことですので、上横手先生は、そういう解釈も成り立つと唱えています。

レジュメの二ページには、右の説の傍証の「①」として、「【史料三】で『丹波』を『丹後』と誤記したことが原因」と書きました。実は、『玉葉』では、それまで業房の妻のことは「業房の妻」としか書いたことがなく、「丹後局」という名前で書いたことは一度もありません。

傍証の「②」として挙げているのは、『愚管抄』に書かれている、丹後局と承仁法親王が密通したという記事です。もし丹波局と丹後局が同一人物だったら、親子関係にある人物がそういうことになったということです。これは大変なことになってしまいます。

ですから、上横手先生は、「後白河院に仕えた丹後局と丹波局という二人の人物が居て、この二人は別人である。後鳥羽天皇の践祚に関わったのは丹波局で、有名な丹後局ではない。『平家物語』は、丹波局の夢の話を基に、丹波局と丹後局を同一人物と考えて記述した」と解釈しています。

私としては、「〈御愛物の遊君〉」という部分がどうしても気になってしまっているので、一般的に言われている同一人物説ではなく、上横手先生がおっしゃるように別人だと考えたほうがいいのではないかと考えております。

○九条兼実との対立と建久七年の政変

続いて、レジュメの三ページです。丹後局をめぐるエピソードとして有名なのは、先ほどから何回も出ている『玉葉』の作者の九条兼実との対立です。

後白河院は、建久三年（一一九二年）三月十三日、六条西洞院殿で六十六歳で亡くなります。

その後、ようやく九条兼実が関白として政務の実権を掌握し、新しい政策を推進していきます。例えば、有名な話ですと、兼実の後ろ盾である源頼朝を征夷大將軍に任じます（『吾妻鏡』同年七月二十六日条）。ただし、最近で

は、頼朝が望んでいたのは「大將軍」の地位で、「征夷大將軍」ではなかったという話が知られています。

そうした中で、九条兼実が対立したのが丹後局です。両者の対立は、もともととは所領をめぐる対立から始まり、後白河院の死の直前に、丹後局は、承仁法親王と、後白河院近臣で後鳥羽天皇の乳母高倉範子の夫の源通親と示し合わせて巨大な莊園を立荘します。しかし、後白河院が亡くなったあと、兼実は、これを全ていったん停廃ちやうはいします（『愚管抄』）。このタイミングで丹後局に対して兼実が放った悪口が「卑賤の者」という表現です。

こういった対立については、「兼実は、丹後局たちを改革に対する抵抗勢力として排斥し、彼らが持っていた利権にメスを入れた」と評価されています（樋口健太郎『九条兼実―貴族がみた『平家物語』と内乱の時代』戎光祥出版、二〇一八年）。

具体的には、後白河院はその死の直前の二月十八日、丹後局との間に生まれた皇女の宣陽門院に、長講堂領という所領を譲与します。長講堂領は鎌倉期の天皇家の二大所領群の片方ですので、莫大な所領です。その結果、丹後局は、宣陽門院が継承した莫大な所領を背景に、後白河院が死んだあとも朝廷に大きな影響力を保持することになります。そして、丹後局は、宣陽門院の後見人である源通親とともに兼実の追い落としを図ります。

それが結実したのが建久七年の政変です。建久七年（一一九六年）十一月、九条兼実は関白の職を追われ、後鳥羽天皇の中宮になっていた兼実の娘の任子（宜秋門院）も内裏から退出します。そして、『愚管抄』の作者であり、同母弟の慈円は天台座主を辞任し、同じく同母弟の兼房も太政大臣を辞任します。このように、兼実の近親者が朝廷の要職から一掃された事件が建久七年の政変です。これをもたらしたのが丹後局、源通親で、いわゆる兼実と対立していた一派による出来事です。

背景としては、兼実とその後ろ盾である源頼朝は、頼朝の娘大姫じんだいの入内問題をめぐって関係が悪化していたとい

うことがあります。一方で、頼朝は娘を入内させるために丹後局一派に接近しました（建久六年（一一九五年）、頼朝は上洛時に丹後局に面会し、豪華な品を献上しています）。

そして、同じく建久六年に兼実の娘任子が後鳥羽天皇の皇女を産んだのに対し、ライバルの源通親の養女在子が産んだのは皇子でした。

こういった背景を基に、丹後局は源通親らとの協力のもと、九条兼実を失脚させるという、政治的に大きな役割を果たすことになります。このことは、後白河院没後も丹後局が政治的影響力を保持していた表れだとは思いますが、しかしやはり、彼女の政治的影響力の根源は後白河院との関係にあったわけです。ですので、後白河院が亡くなったあと、丹後局の政治的影響力は次第に衰えていきます。

○二度の託宣事件

それを象徴しているのが二度の託宣事件です。これも興味深い事件です。二回起こっていますが、それぞれ主役は別人です。一回目は建久七年（一一九六年）で、橘兼仲の妻が主役です。二回目は、それから三年後の正治元年（一一九九年）から建永元年（一二〇六年）までのスパンで起こっていて、源仲国の妻が主役です。二人がそれぞれ「後白河院の霊から、『後白河院を祭る廟堂ひょうだうを建てろ。そこに莊園を寄進してあがめ奉れ』という託宣を受けた」と称したという事件です。

特に、二回目の正治元年（一一九九年）から起こった事件は、かなり大きな事件に発展します。託宣を真に受けた丹後局は、後白河院を祭る廟堂を建てることを後鳥羽院に進言し、廟堂を建てる計画がかなり進んでいきます。しかし、後鳥羽院は最終的に、二つの託宣は天下を乱す妖言だという判定を下し、それぞれの主役の両夫妻は追放

されるといふ結末になります。

また、慈円は兼実の弟なので、丹後局にかなり反対的な考え方を持っていることを差し引かないといけませんが、慈円は、この事件は丹後局のたくらみだと推測しています（『三長記』藤原長兼著）。

しかし、結局、最終的には丹後局の発言が通らずに却下されているということは、丹後局の発言力と影響力が低下してきていることを意味しています。

この事件から約十年後、丹後局は、建保四年（一二二六年）二月ごろに七十歳前後で亡くなります。

○神護寺三像と丹後局

彼女が亡くなったのは承久の乱より前ですが、面白いのが神護寺と丹後局の関わりです。

史料を見ると、丹後局が追善供養を非常によく行っていることが分かります。まず最初に登場するのは、養和元年（一一八一年）七月、夫の屋敷があつた浄土寺堂で亡き夫の平業房の追善供養を行ったという記事です。記事によると、このとき、後白河院は多くの殿上人を遣わして盛大に追善供養を行っています。

丹後局は、後白河院の寵愛を受けていたとはいえ、元夫の業房のことも非常に大切にしていたのか、これ以降、寿永元年（一一八二年）、文治二年（一一八六年）と浄土寺供養を続けていきます。そこには現在の夫とも言える後白河院も臨幸し、二人で業房の追善供養をしている記事があります。

それと関わってくるのが神護寺三像の話です。神護寺では毎年五月の虫干しのときに、いろいろな寺宝が公開されますが、その中で一番有名なものが、昔、教科書にも載っていた源頼朝の肖像画です。現在、神護寺には、似絵の名手の藤原隆信筆と伝わる三枚の肖像画が残っています。それが伝平重盛像、伝藤原光能像、そして、有名な伝

源頼朝像で、これは「神護寺三像」と呼ばれています。

実は、この神護寺三像と丹後局が絡んできます。では、どういう関わり方なのか。神護寺は院政期に少し衰えていましたが、それを復興するときに大きな役割を果たしたのが後白河院と源頼朝です。それにあやかり、後白河院の御所も神護寺の中に造られています。それが神護寺仙洞院です。

神護寺に残っている「神護寺最略記」という記録によれば「のちの時代に神護寺仙洞院に奉納されたものの中に、後白河法皇、源頼朝、平重盛、藤原光能、平業房の似絵がある」という記述があります。先述の通り平業房は丹後局の元夫です。

この記述と現在残っている神護寺三像がどのような関係にあるのかについては、さまざまな研究が行われ、いろいろな説が存在していますが、まとめると三つに分かれます。一つ目は、鎌倉時代初頭（十二世紀末）説です。二つ目は、十三世紀初頭説です。三つ目は、神護寺三像は、実は、足利尊氏・直義・義詮の肖像画だったという説で、大きな話題になりましたが、この説が今の主流になっています。

今回注目したいのは一つ目の説です。一つ目の説は、今残っている三つの肖像画は、先ほどの「五人の似絵がある」という記述との関係がびったり合っているという考え方です。なぜこの五人が選ばれているかというと、それぞれ後白河院と密接な関係にあった人物だからということになります。確かにそれぞれ関係があった人物です。

一つ目の説は、「後白河院は、自分と関係が深かった四人の冥福を祈る意図があつて似絵を作った。その意図を尊重し、丹後局が神護寺に奉納した」という考え方です。ですので、今ある三つの肖像画は、後白河院以外の四人のうちのそれぞれで、丹後局は、後白河院の意図を受けて、自分の夫も含めた似絵を神護寺に奉納したということです。こういうところでも丹後局が関わってきます。以上のようなエピソードで知られているのが丹後局です。

三、卿二位とそのエピソード

○卿二位藤原兼子

続いて、今日のもう一人の主役の卿二位ですが、卿二位はどういった人物なのでしょう。二〇二二年の大河ドラマ『鎌倉殿の十三人』にも卿二位は登場していましたが、卿二位とは藤原（高倉）兼子のことです。「かねこ」でも「けんし」でもどちらでもいいですが、今日は「けんし」と呼びます。

父は刑部卿藤原（高倉）範兼です。卿二位は、没年から考えて久寿二年（一一五五年）に誕生したとされています。なぜ「卿二位」なのかというと、父である藤原範兼の官名にちなんで「卿局」と通称されていました。また姉の範子が後鳥羽天皇の乳母を務めていた関係から、自身も後鳥羽に近侍し、従二位に叙されたためです。

卿二位が表舞台に出てくるのは非常に遅いです。先ほどの丹後局よりも年齢を重ねてからになります。これまでの事典類などでは、卿二位は、四十四歳だった建久九年（一一九八年）の正月十一日に、土御門天皇に仕える正六位上の下級女房として史料上に初めて登場すると言われてきました（『三長記』）。

しかし、史料を詳しく見ていくと、文治二年（一一八六年）四月七日条に、「御乳母・女房ら伺候」と書かれている部分に続いて「女房卿局」と書かれていますし（『玉葉』）、建久三年（一一九二年）段階でも「女房卿局」、続いて、建久六年（一一九五五年）には「卿局」など、ほかの史料にも名前が見えますので、恐らく、後鳥羽天皇が即位した段階から、乳母である姉（範子）とともに内裏に出仕していたと考えられます。ですから、四十四歳よりももう少し早い段階で宮中に出仕していたと思われます。

呼び名の変遷も確認しておきます。位階が上昇すると呼び名が変わっていきます。卿二位は、建久一〇年（一一九九年）正月三十日に典侍となりますが、そのときは、『明月記』（藤原定家著）に「典侍兼子（卿局）」と書かれています。その後、建仁元年（一二〇一年）に従三位、承元元年（一二〇七年）に従二位と上がっていきますので、呼び方も「卿局」、「卿典侍」、「卿三位」、「卿二位」と変わっていきます。

彼女を語るときに一つ言われるのが結婚についてです。二度結婚していますが、最初は、典侍になってすぐの頃の正治元年（一一九九年）に、院近臣である中御門宗頼と結婚しています。

しかし、それからわずか四年後の建仁三年（一二〇三年）の正月、宗頼は後鳥羽院が熊野三山に参詣する際に一緒に同行しますが、その途中で不慮の事故で亡くなってしまったという悲劇に見舞われます。どうも足の裏を焚火で乾かしているときに、足の裏にやけどを負ったことがもとで亡くなったようです。

最初の夫である中御門宗頼とは、そういう形で離れたわけですが、その直後、同じ建仁三年（一二〇三年）に、今度は太政大臣大炊御門頼実と再婚します。大炊御門頼実が卿二位に接近した理由はいろいろありますが、大炊御門頼実は、何十年も連れ添った妻を捨てて卿二位と再婚しています。

その理由として一つ言われているのは、大炊御門頼実は娘を土御門天皇に入内させることを狙って卿二位に接近して結婚したという説です。事実、頼実の娘の麗子は、その後、土御門天皇に入内し、陰明門院という女院になっています。

いずれにしろ、二度目の結婚以降、卿二位と大炊御門頼実夫妻が二人セットで後鳥羽院を後見する形で、後鳥羽院政は進んでいくことになります。卿二位は、後鳥羽院の後見とも言うべき存在として朝廷の重事を左右する威勢を誇り、「権門女房」（『明月記』）、「京ニハ卿二位ヒシト世ヲ取タリ」（『愚管抄』）と評されるような政治的影響力

を担っていきます。これが卿二位の概略です。

○卿二位は後鳥羽の乳母だったのか

では、卿二位の具体的なエピソードを見ていきます。まず、よく言われるのは、卿二位は後鳥羽天皇の乳母だったのか、そうではないのかという話です。かつては、「卿二位は、姉の範子とともに後鳥羽天皇の乳母だった」とされてきましたが、一九九〇年代に五味文彦氏が、「乳母ではなかった」という説を唱え、以降、「乳母ではなかった」という説が一般的になっています（五味文彦「聖・媒・縁」《『日本女性生活史 第二卷中世史』東京大学出版会、一九九〇年）。

ただし、今回、ご一緒にお話をさせていただく野口華世先生も卿二位について書かれていて、そこでは、「兼子が乳母とほぼ同等の役割を担った女房であることは間違いない」と評価しています。ですから、乳母ではありませんが、それとほぼ同等の役割を担っていたというのが現在の理解です。

ここで注意したいのが後鳥羽天皇と平氏一門の関係です。先ほど、高倉天皇には四人の皇子が居たという話をしました。その四人の皇子の話とも関わってきますが、彼らを育てた乳母は誰だったかを注意して見てみましょう。

第一皇子の安徳に関しては、平時忠の妻の藤原領子を筆頭に、複数の平氏関係者が乳母になっています。第二皇子の守貞、のちの後高倉に関しても、平知盛の妻の治部卿局など、同じように平氏関係者が乳母になっています。

実は、第四皇子の後鳥羽天皇の場合も同様で、平時子の異父弟で法勝寺執行の能円の養君になっていることが『平家物語』などに描かれています。

〈例一〉ですが、『平家物語』には、守貞、後鳥羽について、平清盛の妻の時子が、「くるしかるまじ。われそだ

てまいらせて、まうけの君にしたてまつらむ」と言っている記述があります。時子が自ら乳母を選定し、それが異父弟の能円だったと書かれています。

〈例二〉も同じく『平家物語』ですが、平氏の都落ちに同行した能円が、後日、都に残した自分の妻と養君の後鳥羽を平氏の許に呼び寄せようとしています。妻が喜んで向かおうとしたところ、妻の弟の範光が引き留めたという記述も出てきます。引き留められた翌日に、後鳥羽は後白河院の許に呼ばれ、次期天皇に選ばれるというエピソードへと続いています。

ここでも出てきた能円の妻が刑部卿三位局と呼ばれた高倉範子で、卿二位の姉です。彼女が後鳥羽の乳母です。この記述から、本来は後鳥羽も平氏の都落ちに伴われるはずだったことが分かります。

話がかなりややこしくなってきたので、ここでレジュメの十ページの「系図二」卿二位略系図を参照します。真ん中の辺りですが、藤原能兼が居て、その息子に範兼が居て、その娘が範子（刑部卿三位）です。さらに、その妹として兼子（卿二位）が居ます。範子と能円の間に生まれたのが在子（承明門院）で、彼女は、のちに後鳥羽と結婚して土御門天皇を産みます。かなり入り組んだ関係なので、これから話すことが分からなくなりましたら、系図をぜひ参照してください。範子と兼子が姉妹で、その弟が範子を引き留めた範光という関係です。

次に、後鳥羽の乳母の一族の高倉家に注目してみます。能円が平氏の都落ちに同行した結果、都には妻の範子と養君の後鳥羽が残されました。そこで、後鳥羽は範子の生家の高倉家によって養育されることになります。

高倉家は、院近臣層ではありますが、身分はそれほど高くありません。ただし、豊かな財力を持っていました。範子の父の範兼が長寛三年（一一六五年）に亡くなったあと、範子と卿二位（兼子）と範光は、範兼の弟で養子になつていた叔父の範季に養育されます。

「系図二 卿二位略系図」をもう一度見ると、卿二位から見て叔父にあたる範季の娘に重子と言う人が居ます。この女性も、のちに後鳥羽天皇と結婚して順徳天皇を産みます。そして、修明門院重子と言う名前になります。非常に入り組んでいる一族ですが、そういった関係になります。

ですので、卿二位は後鳥羽天皇の乳母ではありませんでしたが、その生家である高倉家が後鳥羽天皇の乳母の一族であったために、恐らく、姉の範子とともに乳母として認識された可能性があると考えられます。

○卿二位の政治的影響力の変化

続いて、卿二位の政治的影響力について段階的に見ていきます。第一段階は、源通親の権勢と土御門天皇の即位に関する段階です。源通親とは、先ほど出てきたように丹後局と手を結んで九条兼実を失脚に追いやった人物です。後鳥羽天皇の乳母だった姉の範子は、能円が平氏と一緒に都落ちしたあと、源通親（宣陽門院の後見人）と再婚します。これは一一八七年より以前だと推測されています。能円との間に生まれた娘の在子に関しては、そのときに源通親の養女になります。通親は、後鳥羽天皇の乳母の範子との婚姻を通じて天皇の乳父の地位を獲得します。

続いて、建久六年（一一九五）十一月、養女の在子が後鳥羽天皇との間に為仁親王、のちの土御門天皇を産みます。そこで、通親は建久九年（一一九八）正月、まだわずか四歳の土御門天皇を即位させ、自分は外祖父の地位を獲得します。

外孫の土御門が天皇で、後鳥羽院の乳母である妻も居ましたので、正治二年（一二〇〇年）に範子が亡くなるまでは、通親の政治的影響力は非常に大きなものでした。

それに対し、卿二位は表舞台にあまり出てきません。通親の影響力のほうが明らかに大きくて、卿二位の影響力

は、それほどありませんでした。

それががらっと変わるのが、後鳥羽院の本当の乳母だった姉の範子が亡くなった一二〇〇年頃です。その頃、在子は、よりによって養い親の通親と密通しているといううわさが流れて、内裏から退去させられます。そして、通親も、建仁二年（一二〇二年）十月に病で亡くなります。

そこで、通親に代わって政治的影響力を持ち始めたのが卿二位です。「卿二位の『登場』」と少し大きな見出しを付けたのはそのためです。

ここで、レジュメの十ページの「【系図二】卿二位略系図」をもう一度見てください。真ん中に「兼子（卿二位）」があり、その下に点線があつて「重子（修明門院）」とあります。叔父の範季の子どもで、兼子にとってはいいところにあたる重子が「兼子（卿二位）」の下に来ているのはどういふことかというところ、卿二位は、自分自身には子どもは居ませんでした、重子を養女にしていました。そのうえで後鳥羽天皇の許に出仕させていました。

その結果、重子は、建久八年（一一九七年）に後鳥羽天皇の皇子である守成親王、のちの順徳天皇を産みます。そうすると、後鳥羽天皇は土御門よりも順徳のほうをかわいがり、正治二年（一二〇〇年）四月、守成親王は皇太子に立てられます。

このことに關して少し大きさに言うと、それまでは在子が産んだ土御門を後見する姉の範子と源通親のラインがありました、それが消滅し、順徳を後見する卿二位の新しいラインが形成されたということです。実は、順徳は三歳まで卿二位の許で養育されていたという背景もあり、卿二位とのつながりが非常に強い皇子でもありました。

重子は後鳥羽院にとつて最愛のきさきになり、建永二年（一二〇七年）に女院号宣下されて修明門院という名前になります。それ以後も、一二二一年の承久の乱で後鳥羽院が流されるまで、修明門院は後鳥羽院とずっと同居し

ていました。後鳥羽院にはたくさんのお妻妾さいしやうが居ましたが、そのトップであり、院の正妻の立場にあったのが修明門院です。つまり、後鳥羽院の正妻の重子を養女とし、順徳天皇を後見する卿二位が政治の表舞台に「登場」してきただけです。

○鎌倉幕府との交渉

彼女が果たした役割はたくさんありますが、鎌倉幕府との交渉が一番有名です。レジュメは五ページの一番下の辺りからです。

卿二位は、元久元年（一二〇四年）の將軍源実朝と坊門信清の娘の婚姻において大きな役割を果たしています。当初は足利義兼の娘が実朝の妻として候補に挙がっていましたが、実朝の反対により、京都から迎えることになったと一般的には言われています。

ただし、実朝は当時十三歳ですので、実朝の意思というよりは、権力拡大を狙う北条時政と牧の方夫妻の利害と、公武融和を狙う後鳥羽院方の利害が一致したという解釈が古くからあります（上横手雅敬「北条政子と藤原兼子」『鎌倉時代―その光と影―』吉川弘文館、二〇〇六年、初出一九七七年）。

この婚姻を朝廷側で仲介したのが卿二位です。史料レジュメの「史料四」坊門信清の娘、卿二位の屋敷から関東に出立す」は時間の関係で読みませんが、実は、坊門信清の娘は、卿二位の屋敷から出発して関東に下っているという記事があります（『明月記』元久元年（一二〇四年）十二月十日条。「十日、（中略）今日巳時、信清卿の娘関東に下向す。卿三位の岡崎家から出立す。上皇御棧敷法勝寺西大路鳥居の西、増円法眼これを作る」。これも卿二位が果たした役割を象徴しています）。

というのは、後鳥羽院の妻に西御方と言う人が居ますが、この人は坊門信清の娘で、実は、彼女も卿二位の養女になっていました。このように、大変ややこしい関係になっています。さらに、西御方は後鳥羽院の皇子頼仁親王を産みましたが、卿二位は頼仁親王も手許で養育しています。

修明門院（重子）だけでなく西御方も卿二位の養女になっていたということですので、坊門信清の娘が実朝の室として関東に下る交渉で卿二位が主導的な役割を果たしたのも、恐らく、そこに理由があるだろうと言われています。

一方、幕府方で、この婚姻に奔走したのが牧の方です。坊門家は、牧の方にとっては娘の嫁ぎ先であったため、その縁を通して卿二位と接触を図ったという、野口実先生のご研究もあります。

続いて、卿二位が果たした、もう一つの有名な役割が北条政子との対面です。これが史料レジュメの「【史料五】卿二位と北条政子の対面」です。ここは「史料六」になっていますが、「史料五」に訂正をお願いします。

『愚管抄』に描かれている卿二位と北条政子の対面シーンです（『愚管抄』六 建保六年（一一二八年）二月二十一日。「二月廿一日ニ、実朝母ハクマ野ヘマイラントテ、京ニホリタリケルニ、卿二位タヒタヒユキテ、ヤウヤウニ云ツ、尼ナル者ヲ、ハシメテ三位セサセテ、四月十五日ニ下リニキ」）。

建保六年（一一二八年）二月、熊野詣のために北条政子や時房らが京都にやってきます。政子は、熊野に参詣したあと、四月に都に戻ってきて、そこで卿二位らと対面し、同月二十九日に鎌倉へ帰っていくという流れです。

このとき、政子は、卿二位の推挙によって、尼としては異例の従三位に叙されています。その後、後鳥羽院と対面するように勧められましたが、政子は、それを固辞してすぐに鎌倉に帰っています。

これを前提として、卿二位と政子は対面中に実朝の後継者問題について話し合い、子どもが居ない実朝の後継ぎ

として、卿二位は、西御方が生んだ後鳥羽院の皇子であり、自分が養育している冷泉宮頼仁親王を勧めたと言われています。頼仁親王は実朝室とは叔母とおいの関係ですので、血縁的なつながりも近いということで、お互いに合意したのではないかということです。

それが現実問題として挙がってきたのは実朝が暗殺されたあとです。それが將軍後継者問題です。建保七年（一二一九年）正月の源実朝の暗殺後、北条政子の使者が上洛し、次期將軍として後鳥羽院の皇子の六条宮と冷泉宮を候補に挙げて、その下向を要請します。その史料が史料レジュメの「史料六」幕府、次期將軍として後鳥羽皇子の下向を要請す」です（『吾妻鏡』承久元年（一二一九年）二月十三日条。「十三日、（中略）これ六条宮・冷泉宮兩所の間、関東將軍として下向せしめたまうべきの由、禪定二位家（北条政子）申さしめ給う」）。

頼仁親王（冷泉宮）と雅成親王（六条宮）は、「系図二」卿二位略系図」に出ていますので、確認しながらお聞きください。六条宮は、修明門院重子所生の雅成親王で、順德天皇の同母弟です。冷泉宮は、西御方所生の頼仁親王で、実朝のおいです。さらに、六条宮は丹後局の娘の宣陽門院の養子（猶子）、冷泉宮は卿二位の養君、重子と西御方は卿二位の養女です。非常に複雑な関係ですが、いずれにしろ、卿二位と深い関係にありました。

卿二位は、実は、丹後局と宣陽門院とも近い存在だったと言われています。例えば、丹後局が持っていた所領を卿二位が引き継いだという史料もありますので、両者は深い関係にあったと指摘されています（白根陽子「宣陽門院領伝領の一側面」『女院領の中世的发展』同成社、二〇一八年、初出二〇〇三年）。

つまり、六条宮、冷泉宮は共に卿二位の意向が反映されやすい皇子で、幕府は彼女を媒介に交渉したということです。後鳥羽院の皇子を將軍とし、実朝が後見にあたる形での親王將軍構想を後鳥羽院も承認していたと言われています（坂井孝一『源氏將軍断絶—なぜ頼朝の血は三代で途絶えたか』PHP新書、PHP研究所、二〇二二年）、

実朝が実際に亡くなってしまったあと、後鳥羽院は親王將軍構想を却下します。その結果、九条道家の子が下向して摂家將軍が誕生するという流れになります。

○卿二位が伝えたもの

次に、卿二位が伝えたものですが、卿二位は財産を非常に蓄えていた、富裕の人物としてよく知られています。承久の乱後の嘉祿三年（一二二七年）十二月、卿二位が財産を蓄えていた中山の蔵に群盜が押し入って略奪されたという記事が『明月記』に見えます。

また、卿二位は、二条西町の北にあった本邸をはじめとして多くの邸宅を京都の主要地点に持っていて、それが岡崎に至る二条大路の延長線上に点在していたと、野口先生はおっしゃっています。それは卿二位が経済的感覚に優れていたからだという評価もあります。残念ながら時間の都合により、所領の話は省略いたします。

卿二位は、寛喜元年（一二二九年）八月十六日に七十五歳で死去します。北条政子の没年が嘉祿元年（一二二五年）ですから、彼女とちょうど同じような時期を生き抜いた女性ということになります。

四！院政と「女人入眼」

○政治的影響力を発揮できた理由

最後に、「四！院政と『女人入眼』」です。今まで丹後局と卿二位の話をしてきましたが、彼女たちが政治的影響力を発揮できた理由は何なのかを考えていきます。

慈円は、「女人此国ヲ入眼スト申伝ヘラルハ是也」として、奈良時代の女性天皇から始めて、皇后、母后、摂関期の外戚政治を論じています。これは、女性が政治的な権勢を得る手段を表しています。

確かに、天皇・院・將軍の妻となることは権勢を得る手段です。その象徴が丹後局で、院の寵愛を受けて妻となり、皇女を産んだことで権勢を得ました。一方、天皇・院・將軍の母となることで権勢を得たのが卿二位です。本当の母ではありませんが、天皇・院の乳母の一族として、こちら側に分類できます。

○院政と院政期後宮の変化

彼女たちが影響力を発揮できた理由としては、院政期に天皇の子どもたちの生母の出自が変化したことが挙げられます。摂関期は、摂関家クラスの出身で、正式な婚姻儀礼を経て後宮に入った女性が子どもを産みました。しかし、院政期になると、正式な婚姻儀礼を経ず、身分的にも低い女房クラスの女性も子どもを産むことになります。これは、院によって次の天皇が指名される院政の時代には、生母の出自が問われなくなったことの表れでもあります。

その一方で、摂関期は、天皇の母（国母）であることが大事でしたが、院政期になると、天皇の母かつ院と同居する正妻であることが重視されるように変わってきます。つまり、それは院権力の確立を背景に、院との関係性が重視される時代になったこととも関係しています。それをまさに表しているのが丹後局です。

○乳母・乳父について

さらに、乳母・乳父について展望してみます。鎌倉時代になって母の身分が問われなくなったということは、摂

関家だけではなく、身分が低い院近臣層でも、自分たちが養育する皇子が皇位継承者になる可能性が増加したことを意味します。そうすると、乳母・乳父の一族が重視されるようになります。そして、乳母・乳父は、自分たちが抱えている皇子女を一族全体で大切に養育するようになっていきます。

本来、乳父とは、乳母の夫を指していましたが、鎌倉後期になると、御乳父が一つの地位となり、乳母の夫である必要はなくなりました。乳母とは関係なく、准身内的な立場で養育する地位が登場します（橋本義彦「乳父管見」『平安貴族社会の研究』吉川弘文館、一九七六年）。例えば鎌倉後期の西園寺家がこれにあたります。

このように、院政期以降は乳母・乳父の立場がいろいろ変わってきたことも、恐らく、今回見てきたような院政と後宮の変化や、皇子女の存在形態の変化に関係していると思われます。鎌倉期の乳母・乳父と御乳父の分離現象も、院権力・後宮の変化から考える必要があります。

少し難しい話になりましたが、結局、公家社会における「女人入眼」をもたらしたものは院政の成立だと評価できるのではないか、というのが今回の話です。

おわりに

○個別研究から政治史へ「悪女」からの脱却

今回、あらためて自分なりに卿二位と丹後局の研究を振り返ってみました。その結果、これからは個別研究だけでなく政治史上にしっかりと彼女たちを位置付け評価する必要があると考えました。そして、「悪女」論からはもう脱却しようということです。

卿二位と丹後局は、今日採り上げたような、さまざまなエピソードが古くから知られていて、それが繰り返し採り上げられてきました。しかし、今までは、女性である彼女たちの生き様や個性ばかりが重視されて、その話が政治上に組み込まれることはありませんでした。今後は、その作業をしていく必要があると思います。

例えば、卿二位の二人目の夫の大炊御門頼実の評価です。彼に対しては、数十年連れ添った妻を捨てて、権力のために卿二位と結婚した、ひどい男性のように評価されていますが、逆に言うと、卿二位は彼と何のために結婚したのかも考える必要があります。

というのは、女性である卿二位の正式な職務は上皇への内奏、伝える役割です。後鳥羽院政の実際の運営に直接関わろうとすると、政治的なパートナーとなる男性が必要になります。そこで、当時、順徳の東宮傳とうぐのふだった頼実を卿二位があえて選択した可能性もあるのではないのでしょうか。権力へ擦り寄る頼実ではなく、卿二位側の理由も重要ではないでしょうか。このように、両者を含めて政治史の中で考えていく必要があると言えます。

同じく丹後局についても、「個性の非常に強い女性」で終わるのではなく、彼女が産んだ宣陽門院が継承した所領の形成に、丹後局が大きく関わっていることを考える必要があります。その所領は、鎌倉期の天皇家にとって非常に重要な所領です。大覚寺統、持明院統、そして、両統迭立てつり、南朝と北朝の分裂という、そこまでの影響力を持つてしまうような所領です。そういった影響力を及ぼしたことも、もう一度丁寧を考える必要があります。

したがって、今後は院政期から鎌倉期の政治史に丹後局と卿二位をしっかりと位置付けていくことが必要になると考えます。

最後のあたりは時間がなくなつて、かなり駆け足になってしまいましたが、私からの報告は以上です。ご清聴ありがとうございました。

(終了)

〈キーワード〉

丹後局 卿二位 院政